
1 1 月 2 日の夕暮れ

林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

11月2日の夕暮れ

【Nコード】

N9669C

【作者名】

林檎

【あらすじ】

もやもやしすぎたので書きました。不思議すぎる文章です。

今外の世界で何か起きて、朝が来なくなればどんなにいいでしょう。

もしくは貴方の家の猫になる。

そうすれば待つ事が出来る。

さあ毛並みを整えてちょうだい。

コーヒーには砂糖を入れないし、甘い物は苦手なのです。

黒や紫が好きだから明るい色は嫌いです。

触れるか触れないかの距離を大切にしてください。

うつとおしくなければいつまでもここに居てくれるでしょう？

また何か忘れ物をしてくれれば有り難いのですが。

この部屋に理由がなくなっちゃうと、私は夕暮れ時に負けてしまう。眠れない夜には唯ひとつを考えています。

約束はやっぱり果たされないし。

無事に明日が来たって喜ぶべき事は何も無いのです。

真っ暗な窓ガラスには私しか映らないし。

見えない貴方と背比べしてみても、胸が苦しくなるだけで。

願いは透き通る夜気に吸い込まれて、ビルの向こうへ流れていったけれど。

星がないから今はそれさえできず。

貴方の涙はさぞ美しかろうに。

貴方の背中はず温かかろうに。

私による貴方の笑顔はさぞ愛しかろうに。

見えない事ばかり。

し忘れたことばかり。

貴方が帰ってしまうと、やり残した事がポツポツと壁に映るのです。壁はスクリーンのように冷たい文字を映しだします。何故に私独りなのか。

見えない貴方の行く末を案じます。

そこには私の嫌いな太陽の光と、それを反射させる青い水があることでしょう。

私の蔭はないのです。

いくら分厚い扉に耳を当てても、足音どころか風の音すらしません。

ここは唯のちつぽけなワンルームだったはずなのですが、いつしか複雑な空間になっていました。

お酒を作る気にはなれません。

来月の携帯代すら危ういのですが。

もうどうしようもないのですよ。

ほんの少し昔に憧れていたあの彼すら、今では輝きを失ってしまい私には出て行く目的がひとつもないし。

途方にくれたので赤いペディキュアを塗りたくっています。次会う時まで美しく保てたらいいのですが。

貴方は無邪気な顔をして残酷な事を平気で言いますが。

それでも何も無いよりはまだマシです。

この間、マンションのエレベーターで屍体を見つけました。

誰かに似ている、と不思議に思ったのですが。

どうやらそれは私だったようです。

ピンヒールを履いた美しい脚の女の人が後ろで笑っていました。気が遠くなります。

外での私はもう死んでしまったのです。

気がふれたとお思いでしょう？

いいえ。

私はここで貴方の残り香と眠っています。

温かい毛布の中ですら唇が震えますが。

生活の全てを破棄してしまいそうです。

貴方が生きているだけで、まだ私が生き続ける意味があるようです。

思い返せば、満たされた事など一度もありません。

街路樹から白い羽虫が飛んできて、煩わしいほどＴシャツに紋様を作ります。

払っても払っても、果てしなく毎日は連なります。

もうかれこれ、こうして二十年と少し歩いているのです。

貴方なら恐らく笑い飛ばす事でしょう。

平然と無視をして、私のＴシャツを破り捨てるのは明らかです。

なんだったいいいのです。

それなら少しは意味があると。

こじつけたらいいい。

いつか見せてもらったあの景色ほどの孤独を、私は今まで知りませんでした。

私の頬に触れる貴方の指先ほどの悲しみを、私は知りませんでした。貴方の茶色い瞳ほどの苦しみを、どうやっただって他に見つけられないのです。

一人で歩けば、冷たい風が睫毛に触れます。

公園には誰一人居ないのに、茜に照らされたブランコは揺れていました。

コスモスは群れて、クラクションと笑い声は途絶えません。なんて寂しいのでしょうか。

暮れるか暮れないかの時、ジオラマの街並には光と影のコントラストが美しいでしょう。
ちゃんと暗くなったら、私はあそこを走っていきます。
金色のピンヒールで。

（後書き）

最後まで読んで頂いた方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9669c/>

11月2日の夕暮れ

2011年1月20日01時43分発行